

人生の歸趣

統攝の卷

前篇

人生の歸趣……………一
 人生の目的……………三
 独尊……………八
 統攝……………二〇
 帰趣……………二七
 後篇……………
 正婚式……………四三

人生の歸趣

人生の本源たる
 根本
 中心
 終局

之を宗教には宗の三義なる猶尊統攝歸趣に配す

1 獨尊——天命——統攝
 天恵——歸趣
 宇宙唯一無比の靈體
 君の如く(イ)
 親の如く(ロ)

(イ) 君主に比す——天命の源、神聖なる權威者として萬有に君臨す
 例、明治天皇御製、孔子天道長敬語、釋尊獨尊說

(ロ) 親に比す——儒道二教 近……乃祖乃父 如來藏性

遠……一大元氣 佛敎——個人業、共同業感、阿頼耶識

一大元氣——とを合して絶對大靈ビルシヤナとす
 一大心靈——

大宇宙の獨尊を小宇宙——人の靈性の本尊として歸向信順するなり

2 統攝

大靈は大法則を以て萬物を統攝す

之に二面あり 自然の統制……生成……因果律
 心靈の統制……攝取……目的理法

萬物を統制するに小は大に、下は上に支配せらるゝ理法あり
 大靈が宇宙を統攝する理法に則りて小天地なる自己を攝理する之を宗教心と云ふ。

3 歸趣

大靈が萬物を養成し終局に歸一せしむる勢能
 生成歸趣の順序

絶對大靈より相對世界を發展し世界より生物を發展す。
 生物が極小より展轉進化して人類を生成す

人類は天性、理性、靈性を進化發展し靈性にして大靈に歸一す
 生成には絶對より相對に、無限より有限に、

歸趣には有限より無限に、差別より平等に歸一す

宗教は宇宙の大靈と人の心靈との宗教的關係、宇宙大我と人の小我との間に成り立つ。

人生の目的

人間と生れて何の爲めに生きてゐるか云ふことに就きては進んだ人は其目的を高尚にする、人格の低い者は其目的が低いのでございます。近い例を申しますと、市中に澤山な人が通行して居るのを見て其一人々に對して何所へ行きますかと尋ねますと或は斯う云ふ家に行くとか又は散歩に行くとか何か目的があるに違ひない、只だブラ／＼と遊び歩いて居る人はなからうと思ひます。但し何所へ行くかと云ふ目的なしに歩いて居るやうな人がないでもありませんが、それは確かな人ではありませんのみならず、一生目的なしに歩いてゐる人は實につまらぬものであります。人生と云ふものは那邊に向つて進む行くのであるかと云ふことを知らぬ人は丁度馬車馬と同じ事である生活であります。馬は馭者の爲めに鞭うたれるから何所へ行くかと云ふことは知らずに進み止まれと云へば止ります。即ち馬は盲目的であります。人間も何所だか知らぬが學校へ親が入れて呉れて、それから結婚をする、結婚すれば子供が出来、出来れば育てなければならぬ。それは世間がするから自分もしなければならぬと云ふのは盲目的生活であります。段々世が進みますと人間は萬物の靈長であるから確かな目的を定めて進まなければならぬ。而も進むに従つて自分の目的が高等にならなければならぬ。さうして人生の歸着する所に進んで行くのであります。人生の歸趣と云ふものは研究して見ますと趣味のあるものと存じます。人間智力が進みますれば高等の目的を以て進みますから猶更趣味が深くなると思ひます。そこで人生を宗教的に見て行きまして人生を唯形骸のみに見れば實に價値が低い假令生活の程度に高低は有するものゝ歸着する所は墳墓の塵と化して仕舞ふのである。偕て人間は何を目安にするかと云へば、動機と目的即ち自己の伏能を開發して正當に生活するのであります。伏能とは人間の精神の奥に伏在せる佛教で云ふ佛性であります。人間は誰も靈妙なる佛性を有つてゐるけれども、たゞ棄て置いていたのでは開發が出来ませぬ。例へば人は立派な頭腦を持つてゐても知能を啓發する教育を受けませぬと働きが出来ぬと同一で立派な靈性を有つてゐても開發が出来ず、可憐寶石を空しく土中に埋めて置くのであります。爾ら

四

は其靈性を如何に開發し如何にして養ふかそれを研究しなければならませぬ。自己の方から申しますれば開發しますと自分の心か理に明るくなつて來ますから、人生生きてゐます中にも理に適つた生活が出来ます。それが假令人間と云へども開發が出来ませぬと動物と同じくなるのであります。それで動物の方から申しますと自分の持つてゐるものを開發して行くのであります。之を宗教から云へば吾々が斯うして生きて居ますのは大きな宇宙の大法其規則に従つて活かされて居りますのであります。でありますから宇宙の大法に従つて行かなければならませぬ。爾うしますると吾々は宇宙の大法によつて活かされて居るのであります。爾うして吾々を活かして居りますのはそれ／＼目的があるのであります。宇宙の規則の中に目的があつて吾々を活かして居るか又は唯だ目的なしに因果律的に萬物を活かして居るか云へば宗教から云へば、宇宙には大法があつてそれに隨順すれば成佛することが出来る。それを法性に隨順すと申します。それに従つて行けば佛に成りますので、宇宙の目的がある、それに従ひますと吾々の精神は佛になることが出来るのであります。宇宙に眞理があつてそれに従ふから佛になりますので、譬を以て申しますれば宇宙は大きな親であります。吾々は子供であります。例へば人間の親と子供であります。子供が七歳になれば學校に就く。そして學校に行きますのは辨當を食するの目的ではない。即ち教育勸諭にも示し給へる如く、知能を啓發し徳器を成就する所に目的がある。本來子供の頭腦には知能を有つて居るけれども啓發しなければ知識の働きが出来ぬ。修身課にて道徳を養はなければ徳器は成就せぬ。その如く佛教は宇宙の大なる親が吾々人間界でふ學校に入學させた。そして大なる親が天地萬物の備を以て八十年間吾々に斯うして衣食を與へてくれるのは親が子供に衣食を給して學校に通はせると同一である。

六

- 標準
- (一) 宇宙の大法に則り終局目的を定め生活を盡して進趣すること。
 - (二) 自己の伏能なる靈性を開發して正當に生活すべきこと。

七

獨尊

宗教的關係は宇宙大我と人の精神の小我との間に成り立つ。

宇宙の大我は何う云ふ働きを爲して其の勢力を吾々の方に及ぼすかと云ふことを説明します。

古來宗教と云ふことは如何なることを意味したかと云ふに、大我小我の調和、神人合一と云ふ義を以て述べてゐる。我佛敎では昔から宗の三義と云ふ三の義を以て宗と云ふことを解釋して居る。其の三義とは、獨尊統攝歸趣の三である。若し宗の字の訓を附けますと尊いと云ふことである。蓋し天には絶對的尊いものがあるとの義にて、其尊いものと云ふのは人間中の相對的に尊いと云ふことではなくて、絶對的に唯一獨尊を認むるのである。

唯一無二の獨尊を信認して之に歸命し或は信賴するのが宗教心である。宇宙の絶對的獨尊唯一無二の獨尊を認めて自分の全力を之に捧げる。之に歸命信賴することである。即ち自分の精神を確かに立てまして唯一無二の獨尊に歸命信賴するのが宗教心であります。さうしますと唯一の獨尊には萬物に對する法則を以て取り締つて行く自然界には偉大なる天則を以て萬物を支配する、例へば天體の一切星宿より一切萬物に至るまで自然の法則に支配せられてゐる。萬物一として天則によつて支配せられて居らぬものはありませぬ。宇宙唯一の獨尊が即ち如來にして其の尊體に法則と勢力との二屬性を以て萬物を統へ攝め一切を養成して居る統攝と歸趣との二面となる。歸趣の方から申しますと恵みを奉けるのであります。それですから一方から云へば天の大なる親が君臨して天則を以て萬物を支配して行く。一方から云へば大なる親の恵みによりて萬物を養つて行くのであります。それを天命天恵と申すのであります。其の規則の下に行はれ其大なる恵みによりて養はれて行く。親に養はれるから親の下に歸ることが出来るのであります。總ての物が働の結果は元へ歸る。例へて申しますと、天の

九

八

一〇

働にしても太陽を中心として一廻轉しますと正月元日の所へ歸つて来る。若し地球が働かなかつたらば去年の正月元日の所へ歸つて參りませぬ。毎日でもさうであります。一廻り地球が運轉して昨日の朝の所に歸つて来るのであります。若し途中で寢て居るものであれば夜が明けませぬ。總て物の働の結果は元へ歸るものであります。穀の中には芽となるべき勢力を持つて居る。稲に結びました種ですから穀には親と同じ様になるべき勢力を持つて居る。蒔いて置きました天の恵に暖められ養はれて行きますと去年の親と同じ様な米になります。併し乍ら之を俵の中に入れて其儼寢て居れば稲になりはさせぬ。其所で段々働いた結果親の方から育てられる。子供の方でも働きました元へ歸るのであります。人間の子でも母の胎内にやどつた時から親の位置になるべき勢力を持つて居るけれども満足に育つて行きませぬと親と同じ身體になりませぬ。そこで我々は身體の方から申しますれば人間の子供でありますから親と同じ様に働かなくては元へ歸つて来る。靈性を持つて居りますから靈性を十分に發達して行きますと天の大なる親の下に歸つて来るのであります。犬や馬と異つて人間は靈性を持つて居ります。世が進みますれば教育を受け知識を磨いて親の下に歸る。人間は假令如何程偉い學者の子供であつても勉強しなければ親と同じ地位に歸ることは出来ませぬ。天恵によつて養はれますれば大なる親の許に歸る勢力を持つて居るのであります。即ち君主の如く神聖にして犯すべからざるものが天に在りますのであります。あらゆる星でも此大なる君の命令に従はないものはありませぬ。我々は従ふべき性質を持つて生れて居る。さうして一人の恵によつて親の所へ歸して行くのである。

そこで宗の主義に斯う云ふ三つの義を持つて宗教と申すのであります。つまり宗教と云ふものは宇宙に尊いものが在りて我々は歸命信賴するのであると云ふのが宗教であります。

宇宙間如何なる御方が一番尊いかと云ふ宗教觀は其知識の程度だけに神を認めてゐる。最も幼稚な宗教觀は神と云はゞ太陽とか高山とか偶像とか肉眼に見ゆる物の中に

一一

認めて其物を神と想ふて信賴するのである。段々精神が高等に進むに随つて神の觀念も愈々高くなるのである。或所で子供は一體どう云ふ考を持つて居るか考へまして試みに御前方は世の中で何が一番尊いか力を竭して考へて見よと申しました。すると子供でありますから一番尊いものは米であるとか、いやさうでない御金だ、イヤ天道様が一番尊いと云ふ者があつたが此最後の答が子供としては良いのであります。米はお金で買へるではないか。米は天道様の恵がなければ出来ぬではないか。それ等は子供として精神をつくして見ても尊い觀念です。此方の心が進めば宗教觀が遠大に高遠になつて来る。いづれにしても宇宙には偉大なる勢力又恩寵を以て我に嚴臨し給ふ神の存在を信認して而つて自己の總てを歸命する。私の計度を其の勅命に歸命信賴する心が宗教心で、宇宙の獨尊に對する信賴を宗教心とすれば世の偉人の宗教心に就いて二三の例を擧ぐれば、畏くも明治天皇の御製に「朝な夕なみおやの神にいのるなり我が國民をまもり給へ」と宇宙獨尊のみおやの神であります。我が國民をまもり給へ」と國民は天父の恵みに依らなければ生存し得ざるものである。成長して行かぬから守り給へとあります。天子様と云ふことは天の子と云ふ譯なのである。若し人間でしたら人間を御すると云ふことは出来ぬ。同じ人間ならば生命までも捧げて仕へること出来ませぬけれども、天の恵みによつて活きて居るからには天の子たる徳を備へる君の爲めに天命として臣民は従はなければならぬ。天子様は天の子であるから天の親が在りまして、其恵みを享けるから我國民を守り給へ天父の恵みに依つて活きて居るのでありますから天父の恵みに依つて守り給へと云ふのであります。それから又御製に「罪あれば我を咎めよ天つ神民は我身の生みし子なれば」民は我身の生みし子なれば國民の罪は我に歸するのであるから神様は自分を咎められよと云ふのであります。なせなれば子の罪は親の示しが足らぬからである。國民の榮へるのは天父の御蔭であります。國民の禍福に至るまで天に對して天祐神助として感謝祈禱し給ふのは矢張り宗教心に在ります。それから「眼に見えぬ神の心にかよふこそ人の心のまことなりけ

れ」神は神明不測にして肉眼に見ることが出来ぬ。かゝる神聖なる神に對して至誠なる精神より外に感通するものはない。至誠感神である。其故は人の誠は天より賦けた性にて虚偽は人間性として來たものである。人間の中には虚がある。人の前には巧に偽り通しても神に對しては通りませぬ。神に對しては天から受けた至誠でなければ通らぬ。至誠心であつてこそ天に通ずる。此の心を飽くまで開發して行くのが宗教心である。又それが即ち靈性である。次に孔子の語を擧げて見れば、匡人孔子を襲ふ。其時孔子は從容として曰く「天徳を我に生ず桓魋夫れ我を奈何」と桓魋は王侯である。假令王侯と雖其の權威には服せぬ、若しそれ天命ならば甘んじて従ふ。……

(原稿一枚中斷)

是から釋尊に就いて御話して見ましやう。

釋尊の宗教觀と孔子の天に對する觀念は如何に異つて居るかとの比較の如きに至つては出来ぬが、いさゝか説き示された經說に就いて考へる時は、孔子の天に對しては何とも測り知ることは出来ぬけれども、實に畏敬信順しなくてはならぬものゝ存在を信じて居られた。例へば神宮の扉を開いては内を見ることは出来ぬけれども其奥に尊き神の在りものと信ず。故に畏敬すべきである。釋尊の方は夫と趣を異にして唯だ天に尊いものが存するからそれに畏敬し服従は出来ぬ……

(原稿一枚中斷)

……望む所は生死解脱の光のみ。父王が計らひし有らゆる美人を聚め人間一切の快樂を以て太子の志を奪はんと爲るも竟に徒勞に歸し出家得道を欣求して止まぬ。爰に臣下から諫めて白し上げた。いかに太子よ、太子は生死出離の道に心を煩はして出家を志し給へども聞き玉へ、往昔の數多の學者の説を聞くに、或學者は未來に靈魂ありと説き或學説には未來は無しと云ふ。然れば未來の事は有りとも無しとも確定せる説あることはない。斯る有や無やの問題に心を惱し給ふよりは現在の光榮を恣に受け給ふに如かざるにあらずやと。時に太子答へ給ふに、吾は未來の有無問題に意を煩は

すに非ず。今現在自己が無明の爲めに生死を受けて居ることは事實である。云何に自己の其源を覺醒し無明の間は明け生死を解脱して永遠の光明を發見せんと、是吾が志す所である。どうかして生老病死、生活の苦、病死は誰でも持つて居る。之を如何にして夫から救ひ出すかと云ふのが釋尊の修行をせられた目的であります。

(原稿一枚中斷)

悉く降伏して初に天眼明を得て廣く空間に徧ねく次に時間的に三世に通達して一切衆生の此死彼生等の事を現前し彌々臘月八日の曉に無明生死の夢醒めて朗然として正覺を成じて生死の源を盡し煩惱の元を斷じて涅槃永恒の光明を發見せられた。此時に於て釋迦佛陀が樹下に在つて佛華嚴三昧に入つて眞實如來の靈界を顯現せられたり。其時に普通人間より見れば悉達太子が樹下に跌坐して安眠するにあらずやとのみ見ゆるけれども、釋尊の心靈に立ち入つて見れば宇宙全體を盡して悉く眞善微妙なる甚深なる蓮華藏世界にて其の中央に盧舍那如來無量の相好無邊の光明を放ち、微妙の莊嚴せる淨界に在しにして法身大菩薩衆の爲に甚深の妙法を説いて陀受法樂を受けしむ。盧舍那如來即ち法身無量光如來である。是一切諸佛神天の本地一切萬法の本源である。是宇宙の中心たる獨尊である。之を無量壽經には無量壽如來威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ばざる所、是故に如來は無量無邊の光明を以て常恒に十方世界を照して一切衆生をして斯光明に觸るゝ者をして清淨と歡喜と智慧とを得しめ不斷に靈的に活動をなさしむと。是が即ち釋尊の發見し給ふ所の獨尊である。

故に宇宙の獨尊者は孔子子の觀る如き唯だ畏敬すべき計りではなく、無上の智慧と無限の慈愛を以て一切衆生の父たり君たり尊きものである。其唯一獨尊は空間に徧して照すが故に無量光と云ひ時間に互つて永恒不滅の故に無量壽と云ふ。即ち是れ一切諸佛の本地一切妙法の淵源である。

此空間に徧する無限の眞理の大大光明が即ち無量光であり時間に徧して無量壽であります。太陽でも地球でも始があれば終がある。絶待無限は時間でありませぬ。其中に

光明があります。それを發見したのであります。釋迦は身體は人間でありますが発見した無量光は……

(原稿一枚中斷)

本來宇宙には常恒靈なる光明輝いてあるけれども知らざるもの間黑生活するのである。我々が活きて居るのは呼吸して活きて居るのは天の恵みに因つて活きて居るのであります。それを感ずると感じないのであります。

或道人が斯やうな話をなされた。宗教心のない人の心は野中の辻堂の様なもので空屋で主人が居らぬ。時によると旅人が雨に降り込まれて休んで居る事も又盜賊など潜伏することもある。乃至乞食が居ることもあるが、本主人が無いら誰も咎めませぬ。故に盜賊にも主人公の如き權利を持つて居る。若しも客人が善良なる時は穩なれども若し盜賊見た様な胸中の客に出會ふ時には酷い目に遇ふのと同じことで、無宗教の心は野中の空屋と同じく本來一定せる本尊が在るから縁對境色々に變ずる。それを客塵煩惱と云ひ、煩惱の客が替り替りに入る。例へば爰に一村落の長とも云はるゝ人があつた所、村の鎮守の宮が破損して修繕を加へやうと云ふので村の總代連が其相談の上になつて村長の賛成を得てから取掛らうと云ふので村長の許へ出掛けて其事柄を申述べた所、村長得意な時で聞くと大に悦び快諾しやうと思ひ賛表を表して呉れた。十日も立てば再び彌々帳簿を出して兼ねての事に就いてと云ひ出しますと、今度は村長が失敗して大に憤懣の時であつた。然るに先きに喜んだのとは反對に其様なことを聴く時なものと云つて一喝の下に叱りつけ、過日間の賛成とは反對に今日は排斥したと云ふのは、得意の時代と失敗の時と、それは一人の人なれども胸の中の客が異つて居るから他の人では無いかと思はるゝ計りに變つて居る。古人が「惡しとも善しともいかに云ひはてん、折々かはる人の心」と詠まれし如く、外部の縁に隨つて或は忿怒し或は恐怖し喜悅し悲痛し煩惱が一定して居ることが出来ませぬ。人の心は無常にて種々に變轉してあてにならぬ。若し宗教心があれば宇宙の大眞理は常恒不

變でいつも變らぬ眞理無量光が自己精神中に耀いて居りますから、主人の居る所へは盜賊が長く留ることは出来ぬごとく、忿怒が起きても恐怖が來ても大悲の光明に照されると忿怒も其所に居ることが出来ぬ。宇宙に耀いて居る眞理の光が自分の精神の光明となつて自己を支配し警告し安んじ指導して、精神生活の大増上縁と成つて吾光明中に生活行爲することが出来る。そこで現在を通して永遠の光明界に進趨することが出来るのである。

大靈は一切の萬法の一切天則秩序の淵源として一切萬法を統一し攝理する理法が存在し宇宙間萬物一として此法則に統制せられぬものはない。

統攝

大靈は大法則を以て萬物を統攝す。之に二面あり。一に自然の統制、二に心靈の統制。前者は因果律——衆生法、後者は目的理法——佛法。

獨尊統攝歸趣の三義と云ふも別に體が三つあるにあらず。即ち中心は一つなる本尊に其働が一方には統攝として一切智と法則とを以て一切萬物を統へ、歸趣と云ふは一切能でありませ。一切智は自然の智慧であります。人爲則と自然則とがある。人間には統攝と云ふ智慧がありますから物を取り締つて行く秩序が立つのである。文章を綴るにも理性がなければ秩序が立たぬ。故に文章に統一力が出て來ぬ。然るに宇宙萬物を統攝する法則はいかなる所までも完全なる智慧でなくてはならぬやうに、例へば萬物を成生するにいかなる所にも智慧が行き五つて居るには驚かざるを得ぬ。吾々身體が爾うです。我々の身體はどこまでも數學解剖學生理學等のあらゆる智慧を備へなければならぬやうに出來てゐる。云何なる知者にも巧妙なる細工師にても逆も生を造ることは出来ぬ。人間の四支五官五臟六腑いかなる細胞に至るまでも行き届かざる所なく、巧みに機能が具つて居る。實に神の智慧は唯敬服の外なき智慧即ち法則である。人類及び動物の身體や精神ばかりでなく一切の植物に於ても松柏の樹や種々の草

に至るまでも根莖、枝葉各々植物學として説明されてゐるチャンと法則がありて出來てゐる。是又自然の律に行はれてゐる。大きく言へば天の星の循環するも細微な物にもチャンと定まりがあつて天則秩序が有つて行はれてゐる。

さて法則と云ふのに人為則と自然則即天則と有り。憲法を始めすべての規則は人間が人為的に約束して其の規約によりて爲す。故に人間の智慧で爲す。而して一方に人間に出來ぬのが天則であります。例へば太陽の光萬物を照らすことになりしも萬國公法できめたものでもない。自然則すなはち天則である。又天體の働きは誰が定めたか何萬年経つても其の規則の通りに行はる。違約はせぬ。皆天則と云ふのである。熱は物を焼く水の潤ひで低きに流るゝ等の物理學上のきまりも矢張り人間のきめたものではない。矢張り天則である。又人間の眼が色を視耳が聲を聴く鼻が嗅ぐ等の法則も同じく天則なのである。佛教でも唯識論などには人の身と心とに眼が視耳が聞くほどの働より心理上の働きの上に百法を以て法理の存することを説いて居る。又法華經の妙法と云ふも心から一心十界百界千如などゝ、心が迷ふて六凡の衆生と變現し、悟れば四聖の覺者となるも、皆一心から行はるゝ妙法である。妙法と云ふものは如來心が一切萬物に及ぼす理法なのである。

斯理法に大靈から一切萬物と變現するにも天則ありて行はるゝので、即ち萬物悉く因果律になつて居らぬものはない。是則ち自然の理法であります。さうして萬物を作つて行くのであります。其の如く天地萬物の中の人間として我々の精神が天父の許に開發して歸ると云ふ理法があるのであります。我々が因果の理法に依りて天父の許に歸ることが出来るのは丁度米が糶となり其糶が稻となり復た米となると同じことで攝取せられるのであります。

統制自治。大靈が萬物を統制するに小は大に支配せられ小は大に統攝せらるゝ理法がある。例へば吾人の身體中に生へてゐる實に小なる一毫でも數萬の細胞を統制して而も自治體を爲してゐる。又爪は爪て多數の同類元子を聚合して自治體を爲して

居るが、爪や他の部分を合して手と云ふものに支配せられ、眼耳鼻の五官胃腸等五臟六腑其他四支等各幾多の細胞等を聚めて一身體てふものに統制せらる。各個人は各自治體を爲して居るが、それを個々幾千を聚めて一家に統制せられて居る。而して一家が自治體系をなして居るが家々を數多聚めて一町村てふものに統制せらる。各町村は幾千を合して縣政に統制せらる各縣は合して一の國家に統制せらる各國は皆自治體を成して居るけれど共萬國を合して一の地球に統一せられ、地球も一の惑星として自治體をなして居るけれど、幾千を合して總して一の太陽系に依つて統一攝理せられてゐる。斯の如く小なる個體は幾千を聚合して其上に統制せられ展轉して終局の統一者宇宙全體を通して統一攝理せるもの絕對の大靈即ち法身ビルシヤナである。宇宙全體に通じて一大理法の存在する事は天體の秩序的に行はれつゝあるを以ても推察せらる。

宇宙が絕對の大靈から世界は一切萬物乃至すべての生物界を生成するに細大となく自然の法則に依つて行はれて居る。斯く一切生物が世界に生活し生死に流轉する所に自然の法理が在つて行はれて居る。是を佛教で衆生法と云ふ。

自然萬物に自然の理法が在つて行はるゝごとく人間の精神にも理法がある。迷ふて善惡迷悟に種々の六道苦樂の世界と身とを現はし出して衆生法と云ふ。

我々一切衆生は大靈てふ大なる君の法則に隨つて居るを認めて永遠不滅の大靈の直轄の下に歸らんと欲するには大法の光を被りて自己が大法の光を以て自己を統制する法則に隨はなくてはならぬ。是れ即ち佛法と云ふのである。即ち宗教心なのである。

宗教心即ち佛法は大靈の法則を以て自己を治むる法として行くのである。宗教心は自分の靈と宇宙の大靈とが合致して大靈の法を以て取り締りして行く時には宇宙の取り締りと自分の取り締りを同一の關係を以て宗教心をなして居ります。

宗教心と云ふものは大宇宙が大法に依つて行はるゝが如くに我とは小宇宙で大靈に帝王が宿つて人間の身體から精神上に一の國家の體裁をなして居る我々は小宇宙である。大宇宙が天則に依つて取り締つて居るごとく小宇宙なる我眞理に上は上、下は下

として行はれて居なければならぬ。それが宗教心である。天體を見て悉く天則に依つて秩序を不紊す行はれ居るが我小天地にも行はれてゐる。それは宗教心があるのである。又國家でも政治が正しく完全に行はれて居れば良國家で國民も各其職業に安心して勤むることが出来る。然るに亡國になると白晝強盜が横行しても之を制止することが出来ぬ。我々小國家なる精神の靈性と云ふ帝王が居つて種々様々なる心に働きを持つて居るは恰も國家の體裁と同一である。我々の心の中に潜伏して居る之が即ち煩惱賊である。白晝強盜が横行するやうに忿怒とか嫉妬とか憎惡とか怠惰とか云ふ煩惱の賊が横行しても制止することが出来ぬと云ふのが小國家なる人格的亡國である。さうなると國家の一人たる自己の義務が立たぬ如何に立派な國で立派な政治が行はれて居ても自分が立つて行くことが出来ぬ。天體の秩序正しく行はるゝ如く良國家の政事美事に整へる如く、小天地小國家の吾が個人精神が大靈の規則を自己の光として行爲するものは宗教心である。之を佛教に法性に隨順して波羅密を行ふと云ふことである。又我々は人間としての個人の義務あり責任あり之を盡すが故に人間の權利が持つてるのである。又吾人は國家の一員たる義務を盡すから國民の權利が失はぬ。それと同じく宇宙の一員なる小靈の義務があるのは是宗教心なので即ち宇宙の大法に隨つて行く義務がある。之を全ふする故に宇宙の一員として永遠の光明に入る權利が全うするのである。若し胸中に煩惱が起る時あれば靈性が眞理の光に依つて之を平らぐべきが宗教心である。即ち大法の命に従ふのである。是即ち成佛する法なので之を佛法と云ふ。

歸 趣

大靈が萬物を養成するのは宇宙の勢力で親が子を育てる様なもので吾々の宇宙は我々の大なる親である。人間の身を受けるに親がなくてはならぬ如く、宗教にては人間の身に就いての親、又天地陰陽の親と其上の絕對の親とある。人間の親が自己を相續

する第二の自分を作るのが親が子に對する目的である。歸趣とは歸は歸る。親の體に
 なるが親に歸るのである。途中で死ぬる時は親の位地に歸ることが出来ぬ。そこで宇
 宙の絶待が相對世界を發現し一切の生物を發生して居る。宇宙の親がいかに子を育て
 てそして元に歸してくれるかは、其の順序を述べて見やう。宇宙は本來絶待の大靈で
 ある。其大勢力から相對的世界を發現したので、即ち現宇宙の一切を發生した。萬
 物に悉く因果律が行はれて居る。因果的に世界は出来て居る。例へば空間の天體も相
 互に網の如き聯絡あり、時間的には絶待から太陽現れ、太陽から地球、地球も初めは
 大きな瓦斯態で在つてそれが漸次に進化して竟に動植物が發生するやうに成つたとの
 ことは、佛教の進化説とは全然同じとは言はぬけれども此器世間なる世界は何億萬年に
 成つたので其中に生物が住して居り次に破壊の期となりてなど無數の時間を以て生物
 が住する様に成つたと云ふ。地上に生物が發生したのはとまれ極小の生物である。然
 らば其極小の生物がいかにしても漸次に發達し得るやと云はゞ、佛教で云はゞ、云何
 に劣等な生物でも佛性と云ふことまでも發達すべき性能が本來具有して居るから進む
 ことが出来るると云ふも差しつかえはなからう。佛教では一切の生物を通して其の本
 性の根本に於ては同一根底から出たものと説いて居る。故に一切の動物、本同一性で
 はあるけれども、其發達の方面と其程度に於て種々無量の種類と階級とに現はれて居
 る。進化説は生物を形の上から本同一の生物から出ながら進化の階級の上に劣等の動
 物より乃至人間にまで進化して居ると佛教では生物の階級を內的な生活なる精神の方か
 ら六道に無量の種類と分れたと説いてゐる。

さうするといかにして地上には劣等なる生物が人間の如き高等なる生物に進むこと
 が出来たかと云へば、試みに云はゞ大靈から受けた靈性は極小の生物にまで有つて居
 るのは矢張り大靈なる親の性を離れたる一切萬物である譯はないから、大靈の親より
 賦せられたる靈性を以て本能中に伏藏して居て、而して一方には大靈は又天地萬物を
 以て萬物の中にも相互に相扶け相制し共に發達し進化する方法を以て天地に行は

れて居り、生物進化の説によれば極小の生物から無數の階級を経て何千萬年は段々と
 進化してアミバ見たやうな蟲や犬のやうなものに竟に人類と進化し乃至今日の文
 明に發達したので、進化説ではたとひ人間と雖何千萬年間に階級的に進みたる形式
 は歴史は探り返すと云ふて胎内十月の間にそれを階級的に育つと云ふのである。世に
 は人類の靈魂と虱蚤の靈魂とは本同一の物とは思はれぬと云ふけれどもそれでも人類
 でも母の胎内に宿りし計りには精蟲と名けられたるアミバ底の量ではないか。それが
 發生に二ヶ月位には胎兒は人間でも魚類でも鶏でも犬馬でも同じ形式である。恰も魚
 が水中に栖む如く(鰓)があるそれから六月の胎兒には全體に毛のあることは猿の如く
 であると云ふ。彌十月に分娩せられて呱呱の聲をあげる時は人間の兒として而も靈長
 の形を備へて居る。小兒は生れて一ヶ年位は晝間に少くとも二三時間は屋外に置くが
 宜しとのことである。其故は原始人類は屋宅もなき生活を爲したのである故に何も開
 化する人類の兒とてもかやうな歴史を有して居るから自然とそれを取り除くことは出
 來ぬ本性を有つて居る。又世間を六つ七つは憎まれ盛りと云ふのは矢張り或野蠻時代
 の始終翻譯はかきを好んで居たそれを繰り返す傾向を有するのである。

我々はかく進化したる時代に生を愛け現代の人間遠く過去の歴史を顧る時は實に感
 謝せざるを得ぬのである。小兒が漸々に成長して壯年と成る如く生物世界と云ふもの
 も遠き過去から發達して現代の人類と成長したのである。生物が進化の階級に在
 りては各々力を盡して奮發努力の結果此身を得たることを思ふ時吾人は深く悦ぶと共に
 最善の努力をして過去に報ひ將來に(資)せねばならぬと思ふ。

いかにして吾人は宇宙の大靈の寵兒として地上最高等なる人類の身を受けたる幸福
 を……
 (原稿一枚中斷)
 眞善美の靈福を得しむる目的の爲めにと斯く思ふ時實に吾人は感謝せざるを得ぬ。
 如來の本願力と云ふは終局目的即ち……
 (中絶)

靈性を開發して大靈と合一しなければ是程の設備を以て育てられた義務が立ちませぬ。さうでなければ何うしても暗黒の闇に陥つてしまふ。人間は絶對から相對、無限から有限となりて今度また元に歸る。歸る時には有限から無限、相對から絶對に歸るのであります。それを彌陀に攝取されて彌陀の光明界に歸ると云ふのであります。總て佛敎の歸する所は同じ事でありませぬ。信仰に依つて歸依する終局は大靈の許に歸つて釋迦如來と同體になるのであります。之が歸趣であります。

正 婚 式

差 定

- 一、燒香
- 二、酒水
- 三、三拜
- 四、禮拜文
- 五、一拜
- 六、奉告文
- 七、頭上酒水
- 八、正因文
- 九、分花

- 十、供物
- 十一、讚歌
- 十二、點火
- 十三、略懺悔文
- 十四、三歸。三竟
- 十五、正婚宣告
- 十六、念珠授與
- 十七、讚歌
- 十八、獻茶果

(以下順序は次第せず)

結 婚 式

鳴鐘を合圖に司會者立ちて結婚式舉行の事を宣し式の順序及び心得に、

- 一、戒師、燒香、酒水、
- 二、戒師、三禮、
- 三、奉告文

謹み敬て神聖正義恩寵に在ます大慈父に曰した言さく、經に三界は我有、其中の衆生悉皆我子と。惟みるに吾曹慈父の特寵を被り受け難き人身を受け殊に慈父の實在を信じて佛子の自覺を得たる實に聖旨に選ばれたる寵兒たる何の幸か之に如かん。茲に今善男子……善女子……と大ミオヤの聖意を承けて結婚を請ふ。

教祖世尊の聖觸に準じて婚儀を舉げんと欲す、仰ぎ願くば神力加被を垂れて……を成就せしめ給へ。

正 因 の 宣 告

恭しく教祖本生經を案するに吾教祖世尊過去久遠劫に燃燈佛の所に詣つて無上道意を發表せんと欲して供花を覓む。一の乙女子あり、花を携へ來るを見て即ち謂て曰く

吾無上道心を發せり、世尊の所に詣で發願を陳せんと欲す。汝我が爲に花を分與して我志願を助けよ、而して後佛道を成ずるに至る迄我婦と爲て我道業を成せしめよと。本願虚しからず、世々に配偶し竟に佛道を成じて釋迦文佛と號け、花を分けたる乙女は耶輸陀羅姫是なりと。

今教祖の聖蹟に順じて分花供佛の儀を修す。

むつみの正因

一、聖なる我等が教主

過去道意を發す時

花を分けたる乙女子と

妹脊のちぎり誓ひにき

三、背子の立てたる志氣高く

妹の心の花清く

三、上なきさとりを得るまでは

誓ひて仕へまつらるゝ

三、上なきさとりを得るまでは

世々にたがはでむつみける

教の祖の蹟たかし

むつみの法のかしこけれ

四、聖なるみむねを背子はうけ

白くは妹をいざなひて

五、上なきめぐみを妹はうけ

赤き心を脊にささげ

高き天職を助けては

聖意に報ひまつるなり

正婚の頌

聖なる御名をたへては

みむねのあらはれ仰ぐなり

如來の神聖なる聖旨

尊くむつみをなさしめよ

如來の上なき聖寵にて

和ぎむつみをなさしめよ

如來の正義なる聖旨

正しくむつみをなさしめよ

至真にしていときよき

みくにをこゝに格れかし

至善にしていときよき

みくにをこゝに格れかし

如來のきよきみむねもて

圓かにむつみを結びませ

清き婚儀の正因 (重複)

一、聖らる我等が教祖

昔道意を發す時

花を願たる乙女子と

妹脊の契をちかひける

二、背子の樹てたる志氣高く

妹の心の花清く

三、上なき覺を得るまでに

ちかひて仕へまつられし

三、上なき覺を得るまでに

世々にたがはで妹と脊の

教のミオヤの蹟高き

婚姻の法のかしこけれ

四、聖なるミムネを背子はうけ

白くは妹をいざなひて

四、聖なるミムネを背子はうけ

聖意に仕えまつらなん

五、上なき恩寵は妹はうけ

赤き心を背にささげ

貴き天職をたすけては

恵に報ひまつるなり

清き正婚

聖なる御名を稱へては

聖旨の現はれ仰ぐなり

如來の神聖なるミムネ

清くは婚姻をなさしめよ

如來の上なき恩寵を

正しく婚を結びませ

如來の正義なるミムネ

正しく婚を成さしめよ

至真にしていときよき

靈國をここに格れかし

至善にしていときよき

靈國をここに格れかし

至美にしていときよき

靈國をここに格れかし

如來のきよきミムネにて

正しく婚を結びて給へ

正婚正因

廣んで教祖世尊の本生經を案するに過去久遠劫に燃燈如來世に出興して衆生を教化し度脱し給ふ。時に一りの宿因濃厚なる青年あり。大菩提心を發し上は佛道を求め下一切を度せんこと今の如來の如くならんと。即ち燃燈佛の前に詣で、自己の發願を陳

べんと欲し世尊に奉調の禮たる供花を覓む。一女子あり花を携へ來れり。青年誓つて曰く、我無上道心を發せり、今燃燈佛に詣で、大願を宣んと欲す。汝我が爲に其花を願與して我願を扶け而して今より成佛に至るまで我婦と爲つて我道意を成せしめよ。女子其至誠の志願を感じて即ち花を願け其志を助く。宿願慮しからず、生々に婚を結び世々に夫妻と爲つて乃ち佛道を成ずるに至る。即ち世尊の太子たりし時の耶輸陀羅是なり。今正に教祖世尊の正因に倣ひ新婦紅白の花を提して來れよ。然して白花は之を分ちて新郎に願てよ。紅花は自ら齋て其に之を三寶に奉供し新郎の白花は即ち清白の志を以て婦を唱へ新婦の紅花は即ち赤誠の情を以て夫を扶け心を一にし誠を同うして佛道を得るに至るまで無上尊に奉事せんことを誓へよ、是教祖の聖範に準じて婚儀の正因と爲すること凭の如し。

正 婚 宣 告

良に惟れば天の道兩儀に則り人道婚儀を爲す造化の妙用人倫の常道なり。夫婦の道本天真に出つと雖、衆生欲性は殆し。寔に婚禮は人倫の最大禮なり。須らく聖軌に準じて行ふべし。

教祖世尊婚禮の式場に請せられ即ち新婚者の爲に夫婦の道を教へ給ひて曰く、汝等新婚者よ汝等結婚せんと欲せば先づ眞理と結婚せよ。所以何となれば眞理は永遠に渝ることなし。縱令年老ひ形色衰損する時も眞理を以て相愛し相合する時は永く變ることなしと。

今世尊の教に順じて正婚の新郎新婦に告ぐ、卿等先づ眞理と結婚せよ。眞理とは即ち是宇宙一切萬法の本源たる如來の光明なり。如來の光明の中に智慧慈悲神聖正義あり。斯聖意を體して光明の中に夫婦の道を全うし神聖の光の中家庭を作り聖意に事へて現在より永遠の光明に向ふ。夫婦の道は是五倫の本たり。是道全うして人倫、人倫を全うして遠く佛道を成す。希くは新婚者よ、眞理の光明に己を獻けて仕へ奉れよ。是れ神聖なる正婚を結ぶ所以なり。

婚儀正因の疏（重複）

肅て教祖世尊の本生經を案するに過去久遠劫に燃燈如來世に出興して衆生を教化度脱し給ふ。時に一りの宿因淳厚なる青年あり。大菩提心を發して上菩提を求め下一切を度せんこと今の燃燈佛の如くならんと欲す。たま／＼佛の出世に遇へり。燃燈佛の前に於て自己の志願を陳べんと欲して世尊に奉調するの禮とすべき供花を覓む。携花女子に値へり。斯花を求めて誓つて曰く、我無上道心を發せり今燃燈如來に詣で、大願を宣んと欲す。汝我が爲に其花を願ちて我志を助けて今身より乃至佛道を成ずるに至るまで我婦と爲りて我が道意を扶けよと、至誠心を以て誓願を陳ぶ。女子其至誠の志願を感じて即ち花を願與して其意を助く。宿願慮しからずして釋尊の成佛に至るまで生々に婚を結び、世々夫妻と爲りて乃ち佛道を得るに至る即ち世尊の太子たりし時の耶輸陀羅是なりと。今正に教祖世尊の正因に倣ひ、新婦は紅白の花を提け來り、然して白き花をば分ちて新郎に與へよ紅花は自ら齋供に之を三寶に奉供せよ。新郎の白花は即ち清白の志を以て婦を唱へ新婦の紅花は即ち赤誠を以て夫を扶けて共に心を一にし無上尊に奉事することを誓へよ。是れ教祖の聖範に準じて婚儀の正因を爲すこと如凭。

次 に 正 婚

釋尊御在世に一結婚の會に請せられて結婚の教を爲し玉ふ時に汝等新婚者よ、此肉體の結婚せんと欲せば夫に先だち先づ眞理と結婚せよ、而して後に形に於て結婚せよ。所以は何となれば眞理は永遠に變ること無し。たとひ肉衰へ形損するも眞理はかほることなければなりとの教令に準じて正婚の宣白を爲す。

良に惟れば天地は兩儀を生し性剛柔を分つ。陰陽相和し剛柔相扶けて造化人倫の道を爲す所以、衆生の法なり。斯道たるや本天真に出づと雖、衆生の欲天真に違背し若

し道の法の之を約束する法に依らざれば動もすれば道に背く。然れば即ち結婚の法たるや重し。

教祖世尊結婚の式場に請せらるゝこと即ち新婚の夫婦の爲に結婚の法を教へ給へり汝等新婚者よ汝等結婚せんと欲するに先づ真理と結婚せよ。所以者何となれば真理は永遠に渝ることなし縦令形裏へ色壞する時愛随つて衰ふ。然れ共真理は常恒不變なれば汝等夫婦の道は真理を以て結べよ。現在より通じて永遠にまで共に心を同うして相愛し相扶けて、真理とは即ち是。

正 婚 宣 告

惟るに天に陰陽の儀あり。人に夫婦の道あり。是造化の妙用人倫の常法なり。夫婦の道本天真に出づと雖も人心是殆し。婚禮は是人倫の大禮なり。真理常法に依りて斯道を結ばざるべからず。須らく聖軌に準じて以て行ふべきものなり。

教祖世尊の婚儀の會に請せられて新婚者の爲に夫婦の道を教へ給ふ。曰く汝等新婚者よ汝等結婚せんと欲せば先づ真理と結婚せよ。所以者何となれば真理は永遠に渝ることなし。縦令年老ひ形色衰耗するとも真理を以て相愛し相和する時は永恒に變ることなく實に眞の夫婦の道を全うすることを得るは真理にありと。

今世尊の教に順じて正に婚儀を開きて欽みて新郎新婦に告ぐ。卿等先づ真理を體得せよ。真理とは宇宙一切萬法の本源如來の光明なり。神聖と正義と恩寵の光明の中に夫婦の道を全うし正しくして聖き家庭を爲せよ。斯道にして全からは五倫亦全きを得。人倫を全うして當に佛無上道を成すべし。希くは新婚者よ真理の光明中にすべてを献げて大ミオヤに奉事せよ。實に是れ神聖なる聖旨を承けて正に婚姻を結ぶこと斯の如し。

○

吾親愛すべき善き女子よ、爾が齎せる處の、珍妙の花は、吾惜欲する處なり、爾至誠心あらば、我至誠心を容れて、吾に與へよ、我其花を以て、吾大ミオヤに献げ奉ら

んと欲す。

如來 法身無量光は、天地萬法の依て以て生ずる處、悉く如來の則に由らざるなし。吾は一切萬法の則なる如來の法に則りて、爾と共に仕へ奉り、

聖旨を奉體して爾と共に永遠に、此花を献げ我が至誠心を表し、天地自然の法則に準じて、陰陽相和して、天真の理に順はんと欲す。

吾最敬する處の善き男子よ、

天地の大ミオヤに献げんが爲に今此花を欲求む。妾が希望何ぞ之に如ん。願くは妾が至誠を容れて此花を献げ。

君と俱に永しなへに、聖旨に事へ奉らんと欲す。願くは

× × × × ×

歸命謹み敬つて真理の源に在ます如來に白して言さく、

教主世尊が門浮那()に於て婚姻の真理を示し玉ふ高範に則りて新婚者某甲等の爲に正に婚姻の儀を施す。仰ぎ願くは、吾大ミオヤ、神聖正義恩寵の聖意を垂れて、兩個の身心をきよめ

加被力を以て、正しく婚の真理を得さしめ玉はんことを希ひ奉る。

双方其分を盡して

夫婦眞實貞順にして

斯道は寔に是神聖なるものなり。

神聖正義の聖意を仰ぎて始めて結婚の真理を得らるべし、

今肅みて聖旨の來らんことを仰ぐ。願くは

如來 聖寵をたれて、此婚姻の眞を得しめ玉へ。

今身より未來に至るまで、其分を守り、相共に相扶けて聖旨に仕へまつることを得るよう眞正の道に進み得らるるよう。

○

三身即一に在ます最と尊き一りの慈父よ、一は慈父の聖意の在る處、一は宿縁の然らしむる處、心を一にし誠を一にして、聖意に仕へ、新たに婚儀を結びて同心以て聖意に仕へ上らんと欲す。新たに婚儀を受けんことを欲す。

婚儀に因あり。教祖世尊過去無量劫に於て、初めて發心し定光佛の許に花を頒たれたる 婚儀を 人に正因と正婚とす。

我今無上心を起して定光佛に花を、、欲し汝、、を終て我願を満しめば、生々世々我無上道を得るまでに 汝と夫婦と成て我道業を輔けよ、、誓乃至佛果に至

正因と正婚、、正因とは教祖世尊過去世に於て定光佛に詣で道心を志願して供花を 一の乙女子が花を持るを、我に大願あり無上道なり、汝が所携花を頒ちて、

佛道を成するに至らしめば、生々誓て夫婦と成らんとの本誓不空、世々に相婚して竟に佛道を成するに至りしと、今正に此聖範に則り方與供花の儀

昭和五年七月廿八日 印刷
昭和五年七月三十日 發行

編輯兼 山崎 辨成
發行人

印刷人 小林 七太郎
牛込區早稲田鶴卷町四〇三

印刷所 小林印刷所
牛込區早稲田鶴卷町四〇三

東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地

ミオヤのひかり社

振替口座東京六六八五一番